ＹＭＣＡ石巻支援センター

本格始動　地元と交流広がる

昨年11月に開設した「ＹＭＣＡ石巻支援センター」に、４月から常駐スタッフとして伊藤剛士を派遣しています。近況と今後への抱負をたずねました。

◆４月22日、ＹＭＣＡ石巻支援センターオープンハウスを開催しました。餅つきやミニバザー、歌の広場などに地元住民の方々が多数参加され、ＹＭＣＡ関係者と交流し、またＹＭＣＡの活動を知っていただくことができました。前日に仙台ＹＭＣＡで行われた、東日本地区ＹＭＣＡ理事・常議員・総主事研修会の参加者も足を運ばれ、石巻の被災の現状を知り、今後の石巻支援センターの働きをＹＭＣＡ全体でサポートしていただくためのよい機会となりました。

◆４月29日、30日には、女川町総合運動公園にて子ども支援プログラムを行いました。公園内にある仮設住宅住民や近隣小学校に通う子どもを対象に、気軽に参加できる遊び場を提供しました。当日は仙台ＹＭＣＡのスタッフとリーダーに協力いただきました。両日合わせて40名ほどの子どもが参加。リーダーたちと一緒に思いっきり外遊びを楽しみました。

◆「ＹＭＣＡ歌の広場」は月に一度のペースで石巻・女川地域で行なっていますが、４月18日には南センター会員の方々を中心に女川町にて行いました。５月20日には東陽町センター、６月は山手センターの方々に協力いただき、継続して行なっていきます。

◆今後は、どのプログラムも評価・改良しながら継続したいと思っています。４月は「まずはやってみる」ということで、ドキドキしながら新しいプログラムを行いましたが、参加者の様子を見るにどれも満足していただけたようで一安心でした。今回はとにかくチラシを撒いての広報になりましたが、今後はリピーターのクチコミで広まって、多くのＹＭＣＡ理解者ができると良いなと思います。

オープンハウス後は近所の子どもたちが放課後にセンターに寄って遊ぶようになったり、「バザーは無いのか」と女性たちが訪ねてくれたりしました。コミュニティーとしての石巻センターが動き出したのを感じます。

プログラムを行うにはボランティアが不可欠です。ぜひ東京始め全国から多くの方々に石巻に足を運んでいただければと思います。石巻市内の他の支援団体からは、ＹＭＣＡの野外・子どもの活動に期待が寄せられています。ぜひＹＭＣＡの強みを生かした支援活動を石巻の地で展開していきたいと思います。

（石巻支援センター　伊藤剛士）

女川町で開催した「ＹＭＣＡ子ども遊び広場」。帰りには文房具セットをプレゼントした

オープンハウスではつきたてのお餅が好評だった

チャリティーゴルフ大会

桜の下　80人がプレー

第22回東京ＹＭＣＡチャリティーゴルフ大会が、４月12日（木）、成田の総成カントリー倶楽部に於いて、雲ひとつない好天の下、盛大に開催されました。昨年4月に予定していた第21回大会は、東日本大震災後の自粛の思いなどから中止いたしました。

今回、桜満開の成田に80人の方が参加くださいました。ゴルフコンペは晴天であれば80％は成功、無事故であれば90％、皆様が楽しんでいただければ１００％成功です。成績は……人それぞれの問題です。ひどい成績の私から見れば皆様の日頃のご努力には本当に感心させられます。

プレー後のセレモニーは実行委員長の挨拶の後、昨年は中止というご迷惑をおかけしたにも関わらず今回快くご協力いただいた総成カントリー倶楽部の小笠原支配人と、恒例のワンポイントレッスンをしていただいた井上プロ、ご両名に感謝状を差し上げました。

次に皆様からいただいた寄付金40万5千円を、東京ＹＭＣＡに寄贈しましたが、その支援先は、リビー支援／フレンドシップファンド／障がい児支援／国際協力募金／東日本大震災支援などに用いられます。目録を進呈し、廣田光司総主事および笈川光郎会員部運営委員長より御礼の挨拶がありました。

乾杯は最長老ご参加の石橋先生（私の恩師）です。そしてお楽しみの表彰式。男性優勝の橋本さんは私の高校同級生。前回、前々回連続優勝のやはり同級生の照田さんは優勝は逃しましたがベスグロに輝きました。女性優勝の坂入さんはベスグロも獲得、実力を発揮されました。

遠方からご参加くださった方々、そして、いつもながら素晴らしい景品を提供いただいたワイズメンズクラブの皆様、恒例の大きな蘭をご寄附いただいた持田ワイズ、皆様に感謝申し上げます。来年もここでお会いしたいですね。

（大会実行委員長　布上征一郎）

理事・常議員・総主事研修会

３・１１後をどう生きるか

東日本地区ＹＭＣＡ理事・常議員・総主事研修会が４月21日、仙台ＹＭＣＡで開催され、本法人の評議員、スタッフ5名を含め80名が参加した。毎年研修と開催されている。本年は東日本大震災支援活動報告、特に仙台ＹＭＣＡボランティアセンター、盛岡ＹＭＣＡ宮古ボランティアセンターの活動報告を共有し、引き続きの支援を決意するものであった。

そして、元東京ＹＭＣＡスタッフであった盛岡の内丸教会牧師の中原眞澄氏より「３・１１後をどういきるか―新しい挑戦」と題しての講演を受けた。厄除けの神ではなく、傷つく者に寄り添う神であり、そのような神に促され私たちは支援に向かうことである。また、傷を負った上での絆であり、隔たりがあることを美辞麗句で覆い隠さず、原発の問題も含め疎外し合うのでない関わりを願うという支援の根拠を与えられる講演であった。

翌日は希望者であった40名が被災地を訪ね、石巻市大川小学校では献花をし、女川経由にてＹＭＣＡ石巻支援センターオープンハウスに合流し、大いなる励ましを受けた。

（副総主事　本田真也）

石巻ワークキャンプ　ＹＭＣＡ学生５５人参加

３月に石巻市で、５回にわたってワークキャンプを行い、東京ＹＭＣＡの３つの専門学校と山手学舎生55人が作業した。学生たちは、現地の復旧の遅れに衝撃を受け、今後の支援継続の必要性を実感したようだ。

自分にできること　考えた４日間

医療福祉専門学校　介護福祉科２年　福田　進

私たちは３月21～24日にかけて、石巻市の牡鹿半島でワークキャンプを行ってきました。初日は、牡鹿半島の内陸部で、個人宅の護岸の石組みを行いました。そこは、震災後の昨年９月21日、台風15号で甚大な被害を被った地域でした。震災とは直接は関係ありませんでしたが、被災された方のニーズに応え、生活意欲の向上につながる意味では、良かったのではないかと思います。

２日目は、牡鹿半島の海岸線で、道路脇にある小川の掃除を行いました。掃除を行っていくと、子ども用のシューズやぬいぐるみなどの生活観があるものが出てきて、どなたかの高校の卒業証書までが出てきました。こういった物が出てくると、この作業は単なる清掃作業ではないということを実感させられました。

１日目の夕方、石巻市の津波の被害地域を見た際は、その光景に衝撃を受け、何も言葉が出てきませんでした。一年以上経過したのにも関わらず、現地はまだ震災の爪痕を多く残していると実感させられ、あの時のまま止まってしまっていると感じられました。

この今の状況の中で、私たちはいったい何が出来るのだろうか、どうしていくべきなのだろうかを考える４日間になりました。

まだまだ協力が必要

社会体育・保育専門学校　スポーツトレーナー科２年　林　美紅

石巻市の風景を目の当　ちょうど、私たちが石巻市に到着したとき、空はうす暗かったのですが、ただ、光が無いだけではなく、津波で被災した跡地にはカラスが群れをなして徘徊していて、地面まで暗く感じました。

作業をしたのは2日間でした。一日は駐車場作りと、被災現場の瓦礫撤去をしました。そこでは、瓦礫だけでなく車のタイヤなど大きいものから、家電用品、衣服、おもちゃ、日用品など様々なものが土のなかに埋まっていました。なかには、写真も見つかりました。てきぱきと作業を進めていきましたが、皆それぞれ複雑な思いのなか、作業をしていたと思います。また一日は下水道にたまっていた泥や瓦礫を分別しながら、水を流せるようにしました。

これらの作業をしてみて、私自身ができることは本当にちっぽけなことだと思いました。でも、一人一人の、そのちっぽけなものが集まるからこそ、大きなことが達成できるのだと思いました。きっと、どんなに小さくても私たちにできることは山ほどあります。復興のためには、まだまだ多くの人の協力が必要です。

東日本大震災から1年が過ぎました。きっと、震災直後、日本中のみんなが何かしなくちゃ、と思ったと思います。その気持ちを今でも持ってくれていますか。それならば、その気持ちをぜひ行動に移してほしいです。その行動が、必ずどこかで笑顔に繋がります。一日でもはやく日本中に笑顔が溢れますように。

痛ましい光景に言葉失う

山手学舎舎生（大学３年生）　柴田健太

山手学舎からは、舎生４人とスタッフ2人が参加をしました。キャンプ初日に日和山から眺めた石巻湾岸の景色は、生活感が見て取れるような色や光がほとんど無く、その痛ましい光景に言葉を失いました。

次の日から始まった本格的なワークは皆で力を合わせて取り組みました。常にＹＭＣＡのゼッケンを付けての作業となるので、看板を背負っている責任感と緊張感も大きかったです。二日目は石巻センターの一部に残った泥出しや掃除を行いました。三日目には近所の商店街のお宅へ行き、津波に浸かってそのままになっていた窓とシンクの掃除をしました。みんな試行錯誤しながらも泥やサビを懸命に落としました。できることを時間いっぱいまで無心にやりました。ワークは思っていたよりも短い時間に感じられましたが、休憩を取ると急にぐったりとしてしまい、そこで時間と作業量を実感することが多かったです。

ワークから帰ってきた夜、親と一時間近く電話をしました。若さ・力は財産だと言われました。また、震災をメディアが取り上げなくなっても、忘れないことが大事だとも言われ、確かにそうだと思いました。今回のワークで自分がどこまで役に立てたのか分かりませんが、復興の足跡のひとつになれていたら嬉しいと思います。